

武蔵野日曜聖書講筵

十字架上の七言

――ルカ伝第23章27～46節――

1977年4月3日

小池辰雄

行為をもって神に献げる 実言は実現する 「彼らを赦し給え」(第一言) 十字架における無条件の赦し 「今日、汝は我と偕にパラダイス」(第二言) 妙言古今なし 「視よ、なんじの子なり、なんじの母なり」(第三言) 「なんぞ我を見棄て給いし」(第四言) 福音の根本問題 「われ渴く」(第五言) 「こと終りぬ」(第六言) 大声に呼ばわりて 「わが霊を御手に委ぬ」(第七言) 祈り

【ルカ23・27～46】

27 民の大いなる群と嘆き悲しめる女たちの群と之に従う。 28 イエス振反りて女たちに言い給う 『エルサレムの娘よ、わが為に泣くな、ただ己がため、己が子のために泣け。 29 視よ 「石婦・児産まぬ腹・飲まぬ乳は幸福なり」と言う日きたらん。 30 その時ひとびと 「山に向かい我らの上に倒れよ、岡に向かい我らを掩え」と言い出でん。 31 もし青樹に斯く為さば、枯樹は如何にせられん』。

32 また他に二人の悪人も、死罪に行わんとてイエスと共に曳きゆく。

33 髑髏むくろという処に到りて、イエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右、一人をその左に十字架につく。 34 斯くてイエス言い給う 『父よ、彼らを赦し給え。その為す所を知らざればなり』 彼らイエスの衣を分ちてくじ取りにせり、 35 民は立ちて見いたり、 司つかさたちも嘲りて言う 『かれは他人を救えり、若し神の選もび給いしキリストならば己をも救えかし』 36 兵卒どもも嘲弄ちやうろうしつつ近よりて酸すき葡萄酒をさし出して言う、 37 『なんじ若しユダヤ人の王ならば、己を救え』 38 又イエスの上には 『此はユダヤ人の王なり』との罪標すてふたあり。

39 十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏りて言う 『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』 40 他の者これに答え禁めて言う 『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。 41 我らは為しし事の報を受くるなれば当然なり。然れど此の人は何の不善をも為さざりき』 42 また言う 『イエスよ、御国に入り給うとき、我を憶おぼえたまえ』 43 イエス言い給う 『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕ともにパラダイスに在るべし』

44 昼の十二時ごろ、日、光をうしない、地のうえ遍あまねく暗くなりて、三時に



及び、⁴⁵聖所の幕、真中より裂けたり。⁴⁶イエス大声に呼ばわりて言いたもう『父よ、わが霊を御手にゆだね』斯く言いて息絶えたもう。

●行為をもって神に献げる

京都の高雄に神護寺じんごじという寺がある。弘法大師が開いたところだ。寺の中をつらつら見て、非常に感激したのは、あそこに曼陀羅まんだらがある。その曼陀羅の原作に感激した16、17歳の少女があった。その少女はその本ものに感激して、自分はそれを写しとろうと志して、完全に生涯をかけて、一对の曼陀羅を描きあげた。今掛かっているのはその二つなんです。大きなものです。実に丹念に書いています。やはり、ああいう非常に宗教的な時代の作品というものは、今はなかなかできるものではない。よほど優れた霊的な人物でなければ。この一人の女性が生涯をかけて、ただ二枚の曼陀羅を描いて生涯を終わらせた。しかし、それが今掲げられてあって——原作はどういうことになったか、あるいは焼かれたかも知れませんが——いつまでもここに詣もつでる人たちの心をうつつ。素晴らしいわざであったと思う。やはり、信仰とは何かというと、献げることなんです。存在をもって、行為をもって献げることが本当の信仰の姿だということをつくづく思いました。今、プロテスタントの信仰が、

「信仰のみによつて義とされる」

というような、ああいう命題をただ受けとつて、ただ

「信仰、信仰」

と言っている。私は、とんでもないと思つています、この頃は特に。その証拠には何の実も結ばない。結んだものは観念的な葉っぱみたいなものだ。

「信ずる」とは本当に存在また行為一切をもって神に献げることです。私は自分の著作集を、神に献げるといふ意味で書いております。私は印税は一銭ももらいません。献げの気持ちが極めて大事である。今は、すぐ報酬、要求、そういうことばかり考える。そして、すぐストライキ。これでは日本というものは、だんだん悪くなるに決まっています。経済の問題ではない。問題はやはり、心の問題になつてくる。そういう意味において、日本人の今の精神的な在り方がいかに方向が違つているか。憂うれうべきことです。

●実言は実現する

「真理とは何ぞや」

ということ。真理まことというのは「誠まこと」、言が成る。成らざるものは誠でない。ヘブライの思想は、

ヘブライ人の

「アーメン」

という言葉は、



「しか成れかし。そのように成っていただきたい」という祈りなんです。

「そのように汝の御意を成させたまえ」

でしょ。汝の御意が成就するようにと。これが祈りなんです。そして、

「祈りたることは既に聞かれたりとせよ」

という。すべてが実現していくんです。だから、本当の實の言は、実言は実現する。これが言が成るといふこと。神さまの言は、

「わが言は成る」

とイザヤ書にも書いてあるとおりです。

「わが言は靈なり生命なり」

と。キリストの言は全部成っています。そういうように、言と行とが一如である。言そのものももう行の質をもっている。

「信仰によつてのみ救われる」

という。けれども、マルチン・ルター自身は、そう言いながら、彼は本当の行の世界をやつぱり歩いていた。

「行為なき信仰は徒然いたすらである」

と言つて、その言葉へタすると二段構えにとるが、そういう二段構えではない。

「まず信じて、それから行おう」

なんていう、そんなことではダメなんだ。受けとめることは同時に献げることであり、献げることとは行為的な、自分の献身的な行為です。この献身的な行為が本当の讚美なんです。神を讚えるとはただ口で讚えるのではない。そういう角度が極めて大事です。そういう魂になつてくると、正直、力が出てくるんです。

日曜は、いろいろ差し支えるでしょう。けれども、

「日曜は、百難を突破して、自分は神の根源の力を得るために集まるんだ」

と。それだけの気合がなければ、私は集会をやめるよ。

身体が悪くて、どうしても動けない。これは仕方がない。あるいは、車に乗って来てもいい。そうしたら、この集会に出れば治ってしまう。私は何も律法的にものを言っているのではない。とにかく、あなた方の気合が大事なんです。どんなことがあつても決して屈しないというの、やはりそういう力ある信仰なんです。もう「仰ぐ」なんていう字はいらなくらいです。「信行しんこう」と書いたらいい。そういう信行にならなくてはいいかん。

私の話はすぐ本城に入つてしまふけれども。とにかく、一回が一回限り。また一回が永遠的な質をもっている。そういう気合で行きましよう。



●「彼らを赦し給え」(第一言)

そこで福音書を開いてください。ルカ伝23章。とにかく、四福音書は、キリストの最後の一週間とそれから復活のところ、これが最も詳しく書いてあるところです。23章27節あたりから読んでいきます。

27 民の大いなる群と嘆き悲しめる女たちの群と之に従う。28 イエス振反りて女たちに言い給う『エルサレムの娘よ、わが為に泣くな、ただ己がため、己が子のために泣け。』

キリストが十字架の道におられるので——「ヴィア・ドロロッサ」という——女性がキリストのことを思つて涙を流した。そしたら、

「私のためには泣きなさんな。自分のため、また己が子のために泣きなさい」

と。これは一応、神の民が世に捨てられるが——一応ですよ、しかし、それから本当に立ち上がる時が来ます——その悲しみはむしろあなたの方の方に残されると。

29 視よ「石婦・児産まぬ腹・飲まぬ乳は幸福なり」と言う日きたらん。

というのは、エルサレムの滅亡、亡びというものをキリストは予見しておられるから。

30 その時ひとびと「山に向かいて我らの上に倒れよ、岡に向かいて我らを掩え」と言い出でん。31 もし青樹に斯く為さば、枯樹は如何にせられん。』

これは譬えて、「青樹」というのはキリスト自身のことです。審判の日に枯樹はいかにせられん。みな捨てられてしまう。

32 また他に二人の悪人をも、死罪に行わんとてイエスと共に曳きゆく。

33 髑髏という処に到りて、

ちようど頭蓋骨みたいな恰好をしているから。「ゴルゴタ」というのは髑髏です。

イエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右、一人をその左に十字架につく。

十字架が三つあって、キリストはまん中。磔刑というのは極刑です。

34 斯くてイエス言い給う『父よ、彼らを赦し給え。その為す所を知らざればなり』彼らイエスの衣を分ちてくじ取りにせり、

今日の題は「十字架上の七言」で、この最初の言葉が、この

「父よ、彼らを赦し給え。その為す所を知らざればなり」

「アーニー セラッハ ラークム キー エイナーム ヨディキーム マー

Heim ローフェイーム」

これはキリストの直かの言葉です。これはヘブライ語です。聖書の原典はギリシア語であっても、キリスト自身の言葉はギリシア語でないですから。ヘブライ語で書いた新約聖書を私は持っています。訳はその通りです。

「彼らを赦し給え」



と。キリストを、神の子を、罪なき者を十字架にかける。これくらい非合理的なことは、言語道断のことはないわけです。歴史上、本当は一番けしからん事件だ。政治犯として訴えた。「王者」というようなことをキリストが肯定したのだから。

しかし、キリストはこの世の王者ではない。彼は霊界の王者なんです。そして、

「民衆の煽動者」

なんて言われたり。また、

「モーセの十誡を勝手に破った」

と言って。モーセの律法を——十誡ではないよ、枝葉だよ——枝葉を破ったと。

「安息日には何もしてはいけないのにお前は人を癒したり救ったりする」

なんてなわけだね。

まあ、福音書をご覧になれば、キリストとの問答はいつも食い違っているわけです。ユダヤ教の坊さん、ユダヤ教の法学者、律法学者、ローマの官憲、それからパリサイ人^{びと}。パリサイ人というのはモーセの律法をよく知って、これを大いに守っていると自負している連中で、そうでない人たちを見下している連中。「パリサイ根性」というのは、己をよしとして他を見下すのをパリサイ根性という。

それから、当時の文化人、サドカイ派。こういったようなのがみんなキリストの敵です。キリストの味方といえますか、キリストが味方しているのは、いろいろな身体障害者や病人や遊女や取税人や、みんな人に悪く言われているような人たちです。

「お前たち、偽善なる者たちよりも、遊女や取税人の方が先に天国に行くぞ」

なんてキリストは言っている。それは彼らの魂の質をちゃんとキリストは見ているんです。

ダンテの地獄の罪の配列は、感覚的な罪は軽い。だんだん知的な、意志的な罪ほど重いです。さすがにダンテです。そういった知能犯、それから意志的に反逆するやつ。忘恩罪。忘恩者だの反逆者。最後にサタン。サタンは傲慢の霊だから。神さまに対して傲慢なんです。一番霊的なんです、サタンというやつは。だけれども、これは逆らう傲慢の霊だから、一番下になる。酒を飲んだりするやつはまだ上の方です。感性的な罪から意志的、知的な罪の方へと重くなる。

そういう意志的なまた知的なよこしまなものを持っているのが

「心の清き者」

の正反対になるわけです。ダンテの『神曲』は読まなくてはいかんですよ。今度、私が第5巻に出す『百世の師ヒルティ』の、あのヒルティは

「自分が一番親しんだものはキリストとヨハネとダンテだ」

と言っている。

そういう諸々の罪を赦す贖罪、贖い。キリストのこの言葉は正に贖罪の言葉です。

「彼らの罪を赦してやってください」



と。

「自分を十字架にかけたその敵の罪を赦せ」

というのですから。もう十字架で彼は死ぬんです、一応。この理不尽な処置に対して、「赦してやってください」と。罪無き者がみんなの罪を背負って、そして、

「罪を赦してやってください」

と。罪の赦しです。罪無き者だけが、これが本当にできることです。我々人間は人の罪を、そういう意味において赦すことはできない。

もちろん、

「わが赦したることく、私の罪も赦してください」

という主の祈りがあります。その「赦したる如く」とか、あるいは「赦す如く」ということが、もし我々が言えるとするならば、この十字架の赦しを受けとつていなければ、言えない。この赦しを受けとつているから、本当に人を赦すことができる。

まあ、一時赦したけれども、また癩しやくにさわったりする。それではダメなんだよ。本当に赦して——いや、キリストは赦すばかりではないですよ——今度は十字架を担っているんです。私が「担い」と言うのはそのことです。人を本当に担っている。敵兵が傷ついたら、

「よし、あいつにとどめを刺してやろう」

と言って殺すのではない。その傷を介抱して担って野戦病院へ連れていく。いつかも言ったが、日露戦争のときにそういう日本の兵隊がいた。その絵を油絵で私は見た。やはり日本の武士は武士道を本当に心得ている。それが本当の武士道というんです。

何もお互いに憎しみがあるわけではない。国家の政治家が戦争をおつ始めて、それで兵士が身を捨てていく。全く、人間のすることは矛盾だらけだ。

男というやつはどうも喧嘩が好きだね。よくないね、これは。大体、小さい子が喜ぶのは、ピストルだのサーベルだのだ。本能的に、教えもしないけれども、あれが好きなんだ。私も小さいときはそうだったね。木の切れ端をもつてきて、それを一生懸命でナイフで削って、ピストルの形を作ったものだ。今はなにか随分しやれたものができているけれども、昔は素朴なものです。それでも、そういうことを、何もそれで人を殺すとか何とかいう、そういうた明白な意識があるわけじゃないんだよ。何かしらんけれども、そういうのが好きなんだ。えもん掛けをサーベルにしてみたりね。

女性は、始めっからお人形さんだ。女性は何といったって優しい。ただ、男性が本当に正しいことに対して勇氣を持たなくてはいかんわけです。

「義を見てせざるは勇なきなり」

という。



● 十字架における無条件の赦し

キリストは、十字架で人の罪を全部負った。これは旧約聖書の、当歳の疵なき小羊を献げて、犠牲にして罪の赦しを、大祭司が一年に一回そんな儀式をやった。

中国でもあるんですよ、「天壇」というのが。北京にそういうのがある。やつぱり、一年に一回そういうことをやる。牛を屠る。天に対する犠牲の壇なんだ。私は北京を旅行したときにそれをつらつら見てきた。大理石だよ、凄いな。昭和12年（1937年）、支那事変の始まる前の冬でしたけれども。もうあれから中国はすっかり変わってしまった。

その小羊。即ち、キリストは屠られたる羔こひつじとなった。創世記22章のイサクのごとく神はその独子を十字架にかけてしまった。これは人の罪を赦すために、贖罪するために、救うために。罪を赦さなければ、救いにならない。赦すには、ただで赦すわけにいかん。その罪を負うひとがある。罪は罰せられる必要がある。これを代罰だいばつという。代罰ということ是非常に嫌う人があるよ。十字架にはいろんな内容がある。その一つがやはり代罰であるんです。それを

「十字架の意味はこうである」

と決めてしまうことはひとつもない。「意味」だなんていったって、十字架はそんな簡単に分析なんかできやしませんよ。神学者というのは何か決めたがるんだね。本当のものというの、割り切れない。割り切れない構造をもっている。それを私はドラマチックと言います。

羔となってキリストは本当に私たちの罪を100%に、過去も現在も未来も赦してください。二千年前の十字架は今もなお私たちの眼前に霊的な十字架としてある。これを受けとらなかつたら——受けとる受けとらないは理屈の問題ではないですから——

「どうぞ、それで結構です。それでやって行けるものなら、まあ、やってごらん

な」

というだけの話です。私は行けないから十字架に来ます。過去・現在・未来の相対的人間小池なんてものは問題でない。問題でないから、今度は本当のものが来るわけですよ。

十字架の受難と復活と、その次にペンテコステ、聖霊降臨が来る。この三つは切り離すわけにいかない。時間的にはいくら離れていたって、これは真理が貫いているから。いいですか、人ごとのような気持で聞いてたらダメですよ。これは自分の問題だから。

「私はそんなに徹底的に赦されているんですか。ありがたい」

と。もう「ありがたい」の他ないじゃないですか、無条件だから。その他に何か言えるんですか、無条件降伏でなくて。十字架におけるところの無条件的な赦しなんだ。

こんなものは人の思想には出てきませんよ、哲学には。世界中のどんな哲学が一人の人を救うことができたかというんだ。できないじゃないですか。人間の思想なんてものはダメなんです。何も思想を私は軽んずるわけじゃないけれども。思想は人ひとりの人を救う



わけにいかない。聖書は思想の本ではありません。魂と肉体とを全部を本当に救ってしまふところの神の力の、神の愛の、神の生命の消息なんです。

ところが、この聖書だけは、

「まあ、まあ」

と言って、みんな敬遠している。一番必要なものを敬遠している。これはどういうことですかね。だから、伝道の必要があるわけです。まだ、私は言いたいことはたくさんあるけれども、ここで言うのはよすよ。

キリストの十字架の贖罪を、贖罪のキリストを本当に受けとったあなた方一人ひとり、他の一切のものをもつても代えられないですよ。哲学者や何かのものを読んでも、

「ああ、ここままでなあ」

と、楽に分かってしまう。何も驚かない。

「その先はダメだなあ」

と。だから、深い哲学はどうしても宗教に接してくるんです。宗教哲学となってくる。宗教哲学でもまだダメなんです。最後は本当の神学に入っていかなければ。

神学が今度はまた、観念になってしまっているから、信仰の現実でない。マルチン・ルターは神学を非常に強調しました。また重んじました。というのは、ルターにおいては、神学は今のような頭の神学ではないから。

パウロはひとつも神学なんて言いやしない。けれども、世界中の神学が、このパウロさんの手紙から出ている。パウロの言葉は生きているから。神学の奥の——霊神学とでも言うかね——霊神学が、霊的な神学がパウロの中には有機体的にとけている。組織ではない。オルガーニッシュ（有機体的）なんです。ジステマテッシュ（組織的）じゃない。

「父よ、彼らを赦してやってください。その為す所を知らないからです。全く

見当違いを私にやりますから」

と。これほどの言葉がありますか。誰がこんな言葉を発せられるか。自分は十字架にかかって、もう血が流れて死ぬという時に。ただ、キリストからあとの、本当の福音を受けとった殉教者、彼らはやはりキリストのこの精神を身に体していた。第一の殉教のステパノは正に、彼は死ぬ時にキリストのこの言葉を語った。石に撃たれながら、殺されながら、ステパノは

「彼らを赦してやってください」

と。彼はもう天界にキリストを見ていた。そのステパノの殉教の張本人は誰あらん、キリストの弟子のパウロである——その時はまだ弟子ではない——あのサウロ。悪いやつだよ、あのサウロというのは。殺人犯なんだ。だから、パウロは本当に掛け値なしに、

「私は罪びとの首だ」

と言った。けれども、復活のキリストにひっくり返されたから、今度は本当にキリストの



一番弟子になった。あれくらい鮮やかな転回というものはありはしない。パウロの転回は黒が白になってしまったんだ。まっ黒がまっ白になってしまった。己に向いていた者が天界を向くことになった。

●「今日、汝は我と偕にパラダイス」(第二言)

それから、別にその順序がどうということでもありませんけれども、二番目には、ルカ伝のもう少し先を読んでいきますと、

彼らイエスの衣を分かちてくじ取りにせり、

これはそんな預言が詩篇22篇に出ています。

35 民は立ちて見いたり、司たちも嘲りて言う『かれは他人を救えり、若し神の選び給いしキリストならば己をも救えかし』

「自分を救ったらよかろう」

なんて、役人たちが嘲って言った、

「十字架からおりたらよかろう」

なんて。

36 兵卒どもも嘲弄しつつ近よりて酸き葡萄酒をさし出して言う、³⁷『なんじ若しユダヤ人の王ならば、己を救え』³⁸又イエスの上には『此はユダヤ人の王なり』との罪標あり。

「イエスス ナザレーヌス レックス ユーダイオールム」

という。ラテン語とギリシア語とヘブライ語で書いてあった。これはラテン語です。

「ユダヤの王、ナザレのイエス」

と。これが頭文字で

「INRI」

という。そういう罪標がしてあった。

39 十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏りて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』

片一方の盗賊は傲慢なんだ。

40 他の者これに答え禁めて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。』⁴¹我らは為しし事の報を受くるなれば当然なり。

「お前は神を畏れない」と。この片一方の盗賊はなかなか魂がいい盗賊だよな、最期に。

然れど此の人は何の不善をも為さざりき』⁴²また言う『イエスよ、御国に入り給うとき、我を憶えたまえ』

あるいは、

「御国を来らせ給うとき」



という訳し方もありますが。

43 イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕ともにパラダイスに在るべし』

素晴らしい言葉です。これは私は『無者キリスト』に詳しく書いてありますから読んでください。

「キー ハッヨーム(まことに今日) ティツシエー インマーデイ(我と偕に

あらん) ヴェ ガン エデン(エデンの園に)」

これはキリストのじかの言葉です。

「パラダイス」

はキリストにとつては

「ガン・エデン」(エデンの園)

です。「ヴェ」というのは「中に」ということ。

もう、地獄に落ちようとしていた盗賊A——盗賊Bはダメだ、救い難い。まだ高慢に逆らっているから。こいつは滅びだ。これは本当に地獄へ落っこちてしまう——ところが、Aの方は地獄に落ちるはずだったが、最後の告白で、彼はキリストの前に本当に心砕けたから、これはギユーンと天界に、まん中のキリストと一緒に天界に往ってしまった。

「今日、汝は我と偕にパラダイスだ」

と言う。こんな素晴らしい言葉はないですね。さんざん悪いことをした。けれども、最後に

「悪かった。私は十字架にかかるのは当然ですが、せめても覚えてください」

と。イエスというひとは、全的に——分裂がないこと——全的にぶつかってくる者を全部引き受けてしまう。過去がどうであろうと、現在がどうであろうと、自分自身を本当に投げかけてくる者を、キリストは全部引き受ける。福音書を読んでごらん、みんなそうだから。我々の本当の交わりはそういうところに、そういう気合にあるんですよ。人間というのは、第三者の悪口を言ってみたり、それからしばらく音沙汰がないと、

「先生は私のことをどうか思っているのではないか」

とか、なんとかかんとかと、いろんなマイナスの憶測が始まる。そんなことはないんですよ。目と目と合わせて語り合えば、何ということはない。ゲーテも言っている。

「誤解というのは大抵そういうところから生じてくる」

と、『ヴェルテルの悩み』の中に書いてある。

全的に自分をぶちまける。祈りもそうですよ。だから、私は言っているでしょ、祈り入るといふことを。祈り入る。南無は祈り入ることである。祈り入る。

「南無キリスト!」

と、キリストの中に祈り入る。キリストは無条件に受けてくださる。どんな時でも、遅す



ぎることはない。どんなときでも、キリストに祈り入る。

体裁はダメですよ、体裁をつくったって。赤ん坊みたいに——赤ん坊は天使のような目をしていてから——全く無心に。私は幼児を見てみると、その奥に神の姿を見るわけです。守り天使がちゃんと守っている。だから、キリストが言ったでしょ、

「**幼児をいい加減にしてはいかん。天使が守っているぞ**」

と。そういう、全的に自分をぶちまけることが、祈り入ること。祈人（婦人）する、南無することです。

「南無阿弥陀仏」

というのは素晴らしい言葉です。私はキリスト教でなければ、もう浄土真宗だな。

●妙言古今なし

うちは本来、浄土真宗だったんだ。母は浄土真宗で、親父は日蓮宗。お父さんの五十周年忌に日蓮宗の坊さんに来てもらって、お経をあげてもらった。それから、坊さんと私は話したら、

「あんたみたいなきりすチャンは初めてだ」

と。私はあけっぱなしだから。そして、言うことが通ずるわけです。何々宗であろうと、相手が本ものなら、みんな私は分かるからね。

こないだも、神護寺の坊さんが説明してくれて、私は

「いいことを言っているな」

と思って感心したから、あとでまた坊さんと私は話して、

「この買った小冊子に署名してください」

と言ったら、墨でもって、

「妙言古今なし」

と書いてくれました。

「**妙なる言は古今がない**」

古今を通じて誤らずというわけだな。東西に施して悖らずと。昔の勅諭の中には素晴らしい言葉がある。日本人は勅諭をすっかり忘れてしまったけれども。なんと日本人というのはケチ臭くできているかね。そこに真理があれば、はつきり認めたらいいじゃないですか。妙言古今なし。妙なる言には昔も今も同じことである。妙言は永遠であるということですよ。聖書の言は妙言だらけだ。正に、妙言古今なし。だから、今も私たちに語りかけているわけですよ。私はどういふところに行きましても、そこで真理を捕まえてしまう。

「活眼活耳」という。

「活きた眼をもち活きた耳をもって見かつ聞いてこい」
と。英語で



「オール アイズ、オール イヤーズ」
という。ドイツ語で言うなら、

「ガンツ アウゲ、ガンツ オール」

という。この活眼活耳で——バスガールが言う言葉の中にもあるんです、パツパツと響いてくるものが——そういう気持ちでみんなやってますか。真理は至るところにこぼれていまずからね。

「私はもう真理を学ぶ必要はない」

なんて、冗談じゃないよ。こっちはしよつちゆう空っぽになっている。無限無量なことになる。無限無量なことに、

「ゲヴオルデン（出来上がったもの）はダメだ。インマーヴェルデン、常に生成展開

していけ」

と。活きた魂というのはみんなそうです。無限に追究してやまず、満たされつつ追究していく。これが本当の現実また理想をもっているということですよ。

何々主義なんていうものは福音の中にみんな入ってしまう。だから、主義なんて言っただわってはいかんと私は言っている。浪漫主義であろうと、理想主義であろうと、現実主義であろうと、何でもみんな入ってしまうから。

「空の空なるかな」

なんていう虚無主義であろうと、全部、福音は持っています。ちゃんと位置づけています。だから、聖書みたいなのはドラマだから凄い。これは御霊の力と、抱擁力、包摂力がある。こういう信仰の質^{たち}というのはあまりないようだね。

私は第三卷（『無の神学』）はどうしても書かなくては。これは天下分け目の戦いだと思っている。それをね、

「あの小池の野郎はちよつと無教会からそれた」

と言って、みんな私をアウトサイダーにした。

「勝手にしゃがれた。こっちはキリストのお弟子さんたちのインサイダーになりま

したから今にみてる」

というわけだよ。これは

「ディバイン・リベンジ」「神聖なる復讐」

というんだ。私の親しい人がみんな別れてしまった。名前は言いたくないから言わないけれども。孤軍万軍という。天界の万軍と共に歩いているこの孤軍はちつとも寂しくないし、もの凄い力が上からきます。敵が多ければ多いほど。もう、本当は敵がないんだ。

「敵を愛せよ」

というキリストのその「愛する」とは、担いの魂になっているからね。

「可愛そうだなあ」



と思うくらいのものですよ。これは本当です。私は力んで言っているのではない。

●「視よ、なんじの子なり、なんじの母なり」(第三言)

それから、三番目は、ヨハネ伝19章の26、27節です。25節から、

「²⁵さてイエスの十字架の傍らには、その母と母の姉妹と、クロパの妻マリヤとマグダラのマリヤと立てり。

「マグダラのマリヤ」というのはいつもここには出てくる。それから、復活のところが一番出てくるのがマグダラのマリヤです。ロダンが、マグダラのマリヤが十字架のキリストにしがみついているもの凄い彫刻を造った。ちょっとあれは誤解されては困るけれども。なにも裸でしがみついたのではない。あれはロダンという芸術家だから、ああいうやり方をする。マグダラのマリヤの本当にキリストを慕う気持を彼はああいう表現をしただけのはなしです。

²⁶イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言い給う『お

んなよ、視よ、なんじの子なり』²⁷また弟子に言いたもう『視よ、なんじの

母なり』この時より、その弟子かれを^うが家に接けたり。」(ヨハネ19・25)

27)

これはヨハネのことです。他のところで、

「母とは何ぞ、兄弟とは何ぞ。神の心を行う者ではないか」

と言われた。いわゆる血族的なものを、親だの子だの兄弟だのと言っているのではない。神さまの御意を行う者が親子兄弟であるという。血族関係をただいい加減にするわけではない。もちろん、血のつながりというものはどうにもならないものだ、ある意味において。

だけれども、血のつながりがあっても、兄弟殺しなんてものがある。第一、既にカインとアベルから始まっている。頼朝よりのともと頼経よしのねもそうだ。頼朝なんては、その点ではとんでもないやつだ。妬むんだよね、頼経のことを。人間の感情で心清からざるものの最たるものに近いものがこの「妬みと争い」です。嫉妬心と紛争。妬み争いというやつが悪い。こんなものはみんな地獄の奥の方にいる。

血族でなくて、霊族たまのりゆうだね。霊たまの族りゆう。即ち、キリストの、神の愛をもって、天的な愛をもって互いに交わり助け合う。キリスト族。我々はキリスト族なんだ。神族です。親族関係というが、こっちの神族だ。神族、キリスト族です。

キリストが言われたのはそれなんです。この場合は、具体的にマリヤを委ねられた。けれども、もうひとつ別なところではそういうことを言っている。親鸞も同じようなことを言っている。だから、

「ブラザーズ・シスターズ」「ゲシュヴェイスター」「兄弟姉妹」

とクリスチャンが言う。その兄弟姉妹というのはただ形容詞で言っただけはいかん。本当に兄



弟姉妹です。地上の関係をいい加減にしているのではない。地上の関係は地上の関係で結構ですけれども、その奥にまたその他に本当に兄弟姉妹というものがなくては。だから、これを同胞はらから、「やからはらから」という。「やから」というのは本当は「家」という字だ。

「四海同胞と思うのに、なぜ波風が騒ぐか」

と、明治天皇の歌にあるね。大体、天皇は、明治天皇でも今の天皇陛下でも、戦争なんか嫌いなんだ。明治天皇はやむをえずなされたけれども。今度の天皇陛下は本当に嫌だったと思う。天皇を傘にきて、悪いことを天皇の命令のごとくにしてしまったようなことが大いにあるわけだ。

しかし、国際関係を見てみると、キリスト教国なんていっても、また、神さまを否定するものもある。困ったもんだ。いわゆる東西の勢力というものはどうしたらいいか。これは解決がつかないね、神さまの前に平伏すまでは。

そして、そういうところに本当のエクレシアというものがあるわけです。キリストの体としてのエクレシア、教会です。「教会」という言葉がそもそも躓きだから、私は

「幕屋」

と言っている。

●「なんぞ我を見棄て給いし」(第四言)

それから今度は四番目に、キリストはマタイ伝の方で、ある言葉を発せられた。

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」

という言葉です。

「45 昼の十二時より地の上あまねく暗くなりて、三時に及ぶ。46 三時ごろイエ

ス大声に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と言ひ給う。わが神、わ

が神、なんぞ我を見棄て給いしとの意なり。47 そこに立つ者のうち或る人々

これを聞きて『彼はエリヤを呼ぶなり』と言う。」(マタイ27・45～47)

「エリ、エリ、レンマー、シエバクタニ」

と。これはアラミ語で、キリストの母語、キリストのじかの言葉です。「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」と。

「エリ」

と言うから、

「エリヤを呼んでいるのか」

なんて、また悪口を言ったやつらがいるわけだ。

キリストは、パウロが言っているとおり、義人です。

「義人なし、一人だになし。イエス・キリストだけが義人である」

と。「義人」とは何かというと、神さまの御意を徹底的に行う人が義人です。神に100%に従



った人。従順、信頼。神を無限大とし自分をゼロとした人。

「ゼロ＝無限大」(0＝∞)

これが「無者」です。無者が義人なんですよ。

無者が義人なんです。自分を何者ともしないで、神という「無限無量者」を受けとっている、そういう人を義人という。御意みこころを為しているんだから。自分の意ではない、我執ではない、我意ではない。

我意我執がどんなに悪いことかということとは孔子も言っている。私は『この道を往く』に孔子の言葉をあげておきましたけれども。孔子はあれだけのことを言いながら、なぜ、本当にもつと強く

「天」

ということと言わなかったか。「天」という言葉もあるけれども、弱いです。

私心なき無私、私が無い。あるいは、無心という。いわゆる心が無い。無心の心という。心無き心という。いわゆる「心なき人」という、あれではないですよ。あの「心なき」ではない。あの「心なき」の心はいい心なんだ。言葉というのは妙なものでね、使い方によっては全然逆な意味になってしまう。

「私はあなたにこんなに従っていましたのに、なぜ、私をお棄てになりますか。神の義がたたないではないですか」

と。これは本当ですよ。

「なんぞ我を棄て給いし」

という、この叫びがなかったら、

「彼らを赦し給え」

の本当の意味が失せてしまう。義人であるから、人を赦せるんです。けれども、その義人は、自分は義人であるなんてひとつも言わん。

「なぜ、私を善いと言うか。善きものは神さまの他にない」

と。この義は即ち神の義なんです。神の義を賜っているひとなんです、キリストは。義人と言ったって、手離して義人ではない。自分を何者ともしなかったから、その神の義がやってきました。だから、

「神の義は福音のうちに顕れる」

とパウロが言ったその角度です。この言葉にルターが初め躓いていたわけだ。

「神の義は福音のうちに顕れるとは何のことだろうか」

と、ルターさんは苦しんだ。

●福音の根本問題

今日はもう、福音の非常に大事な根本問題を私は語っているんですからね。「正義」の義



ではない。正義はひとつの徳目だよ。この「義」はそういうことではない。全的に神さまの御意を受けとって動くことを義という。

「アブラハム、エホバを信す。エホバ、彼を義となし給えり」と。自分の判断を全部乗り越えて、

「神さま、あなたは本当です。私は全然ダメです」

と。私は自分の知識も経験も全部否定してかかる。そうすると、その神さまがくださった知識や経験やを今度は全部、神さまのものとして生かしていくんです、神さまは。

「棄てて何も無い」

のではない。だから、私は言っているんだ、

「無となると無限無量なものがやってくる」

というのがそのことなんです。相対的なものなんかみんなもう、神さまにあずけてしまう。全部、自分と共に神さまにお返しする。お返ししたら今度は、その無限大なものがやってくる。質的にですよ。質的に無限無量なものがやってくるということなんです。

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」

と。その叫びと共に、それは乾坤けんこんを貫くところの義の柱がこの言葉でもって立つたわけですよ。このキリストの義に遭つたら、みんな審かれてしまうですよ。みんな地獄行きですよ、このキリストの義に遭つたら。だけれども、この100%の義を十字架を通して与えるというのが、この義の恵みということ。「義の恵み」と言ってもいいし、

「恵みの義」

と言ってもいい。恵みに満ちた義です。だから、

「神の義は福音のうちに顕れた」

というのは、その義をキリストは福音のうちにおいて私たちに与えてくださった。

「信仰によって義とされる」

というのがそのことです。

「キリストを受けとる」ことによつて義とされる」

ということがそのことです。だから、我々は罪びとでありながら、キリストの義をいただいている。それは観念ではダメですよ。これがプロテスタントの欠陥なんだ。この

「義とされる」

ということがただお題目だけになっているから。そうすると、パリサイ人パリサイじんになる。義を私としてはダメですよ。そして、この義には霊的な力がある。そういう義であるということが分かっていない。頭で分かっただけでダメです、本当に受けとらなければ。

「赦し給え」

は、これは愛です。徹底的な愛。

「なんぞ、棄て給いし」



は義です。この義と愛とが渾然として一つなんです。この義を与えることが愛なんです。愛するとは可愛がることではない。本当に神さまに喜んで従う、御意を成就する、そういう実存の力を与える。実存の力なんだよ、この義は。実存の力が義で、内容は愛なんだ。これは分けることができない。だから、ドラマチックな構造だと言う。

「なんで、お棄てになったか」

「赦してやってください」

と。これがドラマチックな構造ではないですか。絶対矛盾の自己同一ということだ、この義と愛は。

もう、「十字架の七言」をときどきやるといいよ。そうすると、本当に福音が掴めるから。十字架上で血を流しているキリストが福音の神髄を叫んでおられるわけだ。

●「われ渴く」(第五言)

その次は五番目、ヨハネ伝19章28節、

「²⁸この後イエス万の事の終りたるを知りて——聖書の全うせられん為に——

『われ渴く』と言ひ給う。」(ヨハネ19・28)

「われ渴く」

という。ギリシア語は「ディプソー」という。これはキリストの愛の血が流れた。十字架上で血が流れた。贖罪の血が流れた。血が流れると、渴くんです。これは大変なことです。三分の一流れると死んでしまう。渴いた。キリストは何に渴いたかというのと、神さまの愛に渴いている。彼の血は神の愛の血ですから、神の霊血に、神の愛に渴く。

人間は本当はみんな愛に渴いている。愛が本当に人を救うんです。子どものない女の人
が猫だの犬だのを飼うでしょ。あれはやはり愛すべき、愛する対象に渴くから。自分の子どものように懐に入れたり、一緒に寝たりしている。生命というものはそのものが愛であるし、愛に渴く。

だから、

「われ渴く」

という。

「義に飢え渴く者は幸福なり。その人は飽くことを得ん」

という。キリストが山上の垂訓で、

「神の義に飢え渴く者は幸福である」

と言われた。キリストという義に私たちは飢え渴き、飽くことを得ました。義をいただきました。同時に、愛をいただきました。十字架の愛だから。十字架の愛においてキリストの義が来た。

だから、この「渴く」という一つの言葉。お腹がすいたときよりも、喉が渴いて、真清



水を飲んだときの方が何ともいえない喜びに満ちる。お腹がすいて、いきなり食べると、逆に痛くなったりする。ゆつくり食わずにあわてたりすると。

「ああ、お腹がすいた」

と言って、ものを食べるのも結構なんだけれども、本当に渴いて、そして水を飲んだときのその喜びというものはこの上ないものだ。飢えよりも渴きの方が深刻です。そのことは断食してみると分かる。断食してみると、水を飲まなかったらやりきれない。食べなくなつて、断食は続くんです。しかし、水を飲まない断食をやったら、これは大変なことになる。ヘタすると死んでしまう。

私は八溝山の深山幽谷で——大した断食ではないけれども——とにかく、三日断食してやってみた。渴く。渴くから水は飲む。滝浴びして祈ったら、たちまち異言になってしまった。まあ、青年はたまにはそんなことをやったつていいよな。それが何かと条件付けるのではないですよ、条件付けるのではないけれども。

●「こと終りぬ」(第六言)

それから、六番目。ヨハネ伝19章30節、

「³⁰イエスその葡萄酒をうけて後いい給う『事^{おわ}畢りぬ』遂に首をたれて霊をわ

たし給う。」(ヨハネ19・30)

「こと終りぬ」と。「テレスタイ」というんだ、ギリシア語で言うのと、「テレオー」「完成する」という字の受け身の形です。ヘブライ語では「カラー」という。この場合、キリストは「クッラー」と言われた。これもヘブライ語の受け身の形です。

「ことは終わった。完成した。これで万事終り」

と、キリストは。彼の実存はこれで完成、満月となったわけだ。別な言葉でいうと、

「目的は達せられた」

ということだ。「終り」という字と「目的」という字は同じ字で、「テロス」という字です。「目的論」のことを「テレオロギー」というでしょ。

大体、私たちはみんな未完成だけれども、

「こと終りぬ」

と、キリストは完成してしまった。ゲートは、

「もつと光を」(メーア リツヒト)

と言って、

「カーテンを開けてもつと光を入れてください」

なんて言った。カントは、

「それでいい」(エス・イスト・グート)

と言った。カントらしいね。



● 大声に呼ばわりて

これだけの叫びをあげた。そして、マタイ伝27章50節、

「⁵⁰イエス再び大声に呼ばわりて息絶えたもう。⁵¹視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、また地震い、磐さけ、」(マタイ27・50～51)

何を言われたか分からんよ。だから、七言の中に

「大声に呼ばわりて」

という叫びがある。マルコ伝では15章37節、

「³⁷イエス大声を出して息絶え給う。³⁸聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり」(マルコ15・37～38)

ルカ伝でいうと23章45節から、

「⁴⁵聖所の幕、真中より裂けたり。⁴⁶イエス大声に呼ばわりて言いたもう『父よ、わが霊を御手にゆだね』斯く言いて息絶えたもう。」(ルカ23・45～46)

「イエス大声にて呼ばわり」と、どれにも書いてある。マタイ伝とマルコ伝は、

「大声に呼ばわりて息絶えたもう。視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて」

と書いてある。この大声の内容は、ルカ伝によれば、

「父よ、わが霊を御手にゆだね」

と、それが内容です。マタイ伝とマルコ伝では内容が書いてない。多分、これは二段だったと思う。何かもの凄い異言的な声で、大声に呼ばわった。そしたら、幕が裂けてしまった。霊動を起こした。

そして、最後に、「父よ、わが霊を御手にゆだね」と言われた。「御手にゆだね」という言葉をそんな大声で仰ったとはちよつと思えない。大声に呼ばわつて、そして「父よ、わが霊を御手にゆだね」と仰ったというわけだな、このルカ伝の気持でいうと。

あるいは

「これで終わった」

というのと、それから、

「御手にゆだね」

というその中間あたりに、この大声が出たのではないかと。まあ、はっきりしませんが、ども。とにかく、そういうことで、言葉からいうと七つです。言葉ならざる言葉、響き、それが

「大声に呼ばわりて」

というのをそこに一つ考えてもいいのではないかと思う。

七つの言葉は本当は全部、質的には大声なんだ。音ではないよ、質的にです。質的にはどれも本当の大声なんだ。みんな地の涯までも響くような意味の言葉です。

即ち、



「聖所の幕が切れた」

というのは、旧約聖書の内容、旧約の世界はこれでアウフヘーベンされた。止揚された。即ち、それは全部満たされて、もうそれは要らん。旧約的な宗教は乗り越えられたという意味です。もう、大祭司が小羊を屠る必要も何もない。自分が大祭司となり、自分が羔こひつじとなって十字架にかかったんですから。旧約聖書は全うされたのだから、正に

「わがこと終れり」

なんだ。

「完成された。これからは新約の世界だぞ」

というわけだ。

ところが、ユダヤ人は新約と思わないんです。イスラエルはあいかわらず、ユダヤ教の旧約の世界にいる。

まあ、「マクヤ」のいわゆる手島さんの群の人はしょっちゅう巡礼でイスラエルへ行っている。来年は建国30年か。それで大挙して行くらしい。イスラエルとえらく——悪くはないよ、悪くはないけれども——関係をもっている。私は一遍誘われたけれども、私は私の考えがあるから行かなかつた。

もちろん、「マクヤ」の人たちは愛の人ですから、ユダヤ人との交わりは楽しくやっています。聞いても読んでも分かりません。けれども、ユダヤ人はキリストを認めていないわけだ。そのことには、タブーで触れないんだ、みんな。キリストが救い主であることを認めていない。預言者だと思っている。マクヤの人はキリストの愛でもって交わっているんでしょう。結構なことです。ただ、ユダヤ人はどうしても認めない。そこは、信仰の点でははつきり食い違いがきているわけです。だけれども、ヘタすると旧約に傾き過ぎる、そういうことにならなければ結構ですけれども。

もちろん、私たちは旧約を全部、キリストの光で見えますから、預言者の言葉といえども。もちろん、あるがままで旧約の事態を相対的なものと見ることは結構ですよ。けれども、それをもうひとつキリストの光で本当にその内容に力を与えていく、内容に内容を与えていくわけだ。それは楽にできる。であるから、聖書なんです。マルチン・ルターはやはりそういうように読んでいた。「ヤーヴェー」の「ヘル」「主」というのを全部、「キリスト」として彼は見ていた。パウロでもそうだよな。

「水の出た岩はキリストであった」

なんて、ひどいことを言っている。

●「わが霊を御手に委ぬ」(第七言)

そこで、最後に、

「父よ、わが霊を御手に委ぬ」



これは詩篇31篇の言葉そのままです。

「⁵われ靈魂をなんじの手^{たましひ}にゆだね。エホバまことの神よ、なんじはわれを贖

いたまえり。」(詩篇31・5)

素晴らしい言葉です。これは旧約でも極めて大事な言葉です。詩篇31篇5節、忘れないように。

「私を贖ってくださいました」

と。皆さんも、祈りは現在完了でいかないといかんですよ。

「贖ってくださいました。だから、帰っていきます」

ということ。

「贖ってくださいるなら、帰ります」

ではない。神さまの恩寵の事実の方が先なんだ。その土台のもとに我々は祈っているんだから。

恩寵の現実の中でなければ、祈りというのは力が来ないんですよ。あなた方は、今どこにいるんですか。空気の中にいるでしょ。空気の中にいるから、こうやって生きています。神さまの恩寵の現実の中にいるから、魂は生きている。そして、祈ることができる。

「こうしてください。ああしてください」

が祈りではないですよ。むしろ、感謝と讚美が変わってしまう。そして、どんどん内容が入ってくる。だから、それを本願という。上から本願が来ているから、悲願が成るんです。本願は必ず成るんです。だから、私のは「本願道」と言っただけいい。私はいつか「本願道」という詩を書いたね。本願道なんです。

詩篇31篇5節をそのままキリストは、「まことの神よ」を「父よ」にして、

「父よ、わが霊を汝にゆだね」

と言った。キリストはなにも「贖いたまえり」は言う必要はない。

「私を通して、あなたは贖いの大きな業をしてくださいました」

というわけだ。そんなことはキリストはなにも言う必要はない。事実が証明しているからね。

「わが霊を汝にゆだね」

というのは、いいですか、これは毎日の生活がそれであればダメなんだよな。

「死ぬ時だけそう言いましょう」

ではない。キリストは、

「わが霊は、常に毎日ゆだねてきました。そして最後にまたおゆだねいたします」

と、こういうわけです。神さまにゆだねて、ぶっ倒れてみたら、神の懐の中だったというわけです。そういう図太い信仰にならなければダメですよ。

「私はまだ信仰が足りないし、聖書の読み方が足りないし、人の愛し方が足りないし、なかなかどうも」



なんて、いつまでたったらよくなるんですか。

それよりも、恩寵の現実の中に入ると、質的には100%的なものが動きだす。いつも言っているとおおり、三日月は満月を予想している。欠けるのではなく、満ちゆく月である。この三日月に既に完全性というものがあるんです。完全になるのは、これは向う側のはなし、天国に行つてからののはなし。地上では完全性を持った未完成。未成交響楽という。満たさるべきシンフォニーである。

そこで大事なものは、質が完全性というけれども、いったいその質は何ですかというところ、これが御霊みたまなんです。御霊が来てなければ、「質、質」なんて言つたつてダメですよ。なぜその完全性なんですかと。それは聖霊である。聖霊は全き霊ですから。我々は相対的な人間だから、どこまでたつたつて、現実相対的なんです。破れです。破れにすぎません。破れていながら八方破れで、そして、御霊の完全性があるから天衣無縫的なものがそこにある。破れ衣が天衣無縫であるというんです。

こんな楽しいことはないじゃないですか。どうか、皆さん、そういう突き抜けた心になつてくださいよ。

「どこが間違つているか」

と私は言いたいんだ、正直。それは上からきている御霊の示しによつて私は語っているから。自分の主観でものを言つているのではないですから。

「父よ、わが霊を御手にゆだね」

と。御手にゆだねながら行きます。だから、非常に楽なんです。

「斯く言いて息絶えたもう」

と。とにかく、そこで贖罪死を遂げられた。まあ、それでキリストが死んでしまったものだから、みんな蜘蛛の子を散らすように散つてしまった。

「羊飼いを棄てて、お前たちが散るときがくるぞ」

なんてもう預言しているんだ、キリストは。

「だけれども、そのうちに集めるぞ。聖霊が臨んだら、お前たちは立ち上がる」

と。その前にキリストはこの次の復活節です。今日はそこまで。

キリストの七言は虹のごとし。七つの言葉。虹はどういうところに出るんですか。虹そのものは天涙です。天の涙。雨は天涙である。キリストの十字架は天涙の結晶のようなものです。おわりませう。

● 祈り

永遠に、昔も今もまた後も、永遠の今として私たちの中に、前に、後に来てくださるところのよきさま。キリストは昨日も今日もとこしえに変わらざるなりと。この世界は変転、混沌、止むところをしりませぬ。この20世紀のあと20数年、どのように世の中は悪化して



いくかしりません。21世紀はどのようなにして来るかしりません。この危機的な世界にあつて、私たちは本当の天国を、

「汝、今日、我と共にパラダイス」

という現実を身をもつて証し、いついずこにおいてもそこにあなたの御国を、人の見ると見らざるとにかかわらず、現じていく汝の実存が私たちの実存となつてくださるよう、いよいよ祈り奉ります。

「南無キリスト！」

と申し上げれば、即ち、キリストの中に私たちは自らを投入し、そして、ペテロもヨハネもパウロも、

「我を見よ」

とすることができました。それはわがうちなるキリストでありました。どうぞ、そのように私たちも、あなたの前に本当に平伏すときに本当の権威がくることを受けとり、感謝いたします。

あなたの聖名は驚くべき実を持っております。どうぞ、私たちの信仰が空念仏ではなくして、いよいよ本当のものですように。在りて在らしむるあなたは、私たちを通してまた人を在りて在らしめてくださるよう願ひ奉ります。

一切をあなたに委ね奉れば、あなたは無限無量なるものを自在にお与えくださり、展開してくださるから、感謝です。行き詰まれば行き詰まるほど、患難があればあるほど、いよいよ強くせられ、いよいよ明るくせられるとは、なんと不思議なことでありましょう。

「^せ為ん方尽くれども^{のぞみ}希望を失わず、倒さるれども滅びず」

とパウロが言いました。本当にキリストはこのパウロの中に生きていらつしやいました。どうぞ、そのように私たちの中に生きてください。

そして、この兄弟姉妹たちは進んでいきます。どんなことがあつても、このキリストのあるところ、この御霊のあるところ、何も心配しません。しかし、人間的なものかもし先にたち、そこに立つならば、それは引っくり返っていきます。どうぞ、私たちは本当に主にあつて互いに担い、互いに信じ、互いに愛して進んで行くことができますように願ひ奉ります。

やがて、復活節がきますが、どうぞ、京都方面の集会、また小諸方面、また諸所方々の独りで守っている兄弟姉妹たちの中に、共にあなたへの本当の復活の歓びをいただき、そして立ち上がり、常春のごとき気持でもつて進んで行くことができますように願ひ奉ります。

今、心からの感謝と讚美、兄弟姉妹たちのそれとともに、聖名により捧げ奉る。アーメン。

